

目が覚めたとき、最初に気づいたのは天井の高さだった。

白い漆喰の天井に、金色の蔓草が絡まった装飾が施されている。シャンデリアが朝の光を受けてきらきらと輝き、そこからつり下がった水晶が細かく揺れていた。ベッドの天蓋から薄いレースのカーテンが垂れ下がり、全体がほんのりとバラ色に染まっている。

橘咲は、しばらくその天井を見つめたまま動けなかった。

ここは自分のワンルームではない。六畳の、本棚が壁を埋め尽くした、やかんが鳴き続けても気づかないくらいに仕事に追われていた、あの部屋ではない。

ゆっくりと上体を起こした。

シーツが滑らかに滑り落ち、絹だとわかった。

手のひらをベッドにつく。指先が沈み込むような柔らかさの布団。体の

節々が妙にほぐれていて、かえって不安になる。過労で倒れて、社内のソファで意識を失った記憶がある。救急車を呼ぼうとした同僚の声が遠ざかっていった、あの感覚。その後の記憶がまったくくない。

まさか、と思いながら立ち上がり、部屋を見渡した。

広い。異様に広い。天井が高く、調度品はどれも重厚で、窓の外には手入れされた庭園が見える。馬車が停まっている。執事らしき男が庭を横切っていく。

おそるおそる、部屋の隅に置かれた鏡の前に立った。

映っていたのは、自分ではなかった。

正確には、自分が知る「橘咲」ではなかった。

肩を超えて腰近くまで流れる、赤みがかった艶やかな髪。切れ長で、翡翠のように深い緑の瞳。整いすぎて人形みたいに見える顔。白くて細い首

筋。高い頬骨。夜会に出るような仕立てのいいドレスではなく、薄絹のネグリジェを纏った体は、咲が知る自分よりずっと細く、ずっと線が綺麗だった。

美しかった。恐ろしいほどに。

咲は鏡の中の自分、つまり自分ではない誰かの顔を見つめ、やがてゆっくりと口を開いた。

「……ローゼリア・ヴァンフォード」

声に出すと、するりと名前が出てきた。そしてその名前とともに、洪水のように記憶が流れ込んできた。

王国アルダーンの上位貴族の一人娘。第一王子フェリクスの婚約者。王立学院に在籍する十七歳の令嬢。そして乙女ゲーム『聖女と王子の誓い』における、メインヒロインを虐め続ける悪役令嬢。

ゲームのエンディングで処刑される、その悪役令嬢。

咲は鏡の前に立ったまま、ゆっくりと深呼吸した。

「……そうということか」

落ち着いている自分が少し怖かった。ヒステリーを起こしてもいい場面のはずなのに、頭が妙に冷静に現状を整理しようとしている。たぶん、これが自分の悪い癖だ。パニックになる前に状況確認をしようとする、あの職業病。

ゲームをプレイしたのは、社会人になってすぐの頃だった。残業続きの日々にストレス解消で始めて、気づいたら全ルートをコンプリートしていた。ヒロインの名前はライラ。天真爛漫な聖女の少女が転入してきた学院で、王子や騎士たちを攻略していく王道の乙女ゲームだ。

そしてそのゲームの中で、咲が一番印象に残っていたのが悪役令嬢の口

ーゼリアだった。完璧なまでに意地悪で、嫉妬深くて、プライドが高い。しかし過去に傷を持ち、報われない愛情を一人で抱え込んでいた女の子。むしろ彼女の方が気の毒だと思っただけだ。

そのローゼリアに、今の咲はなっている。

「卒業パーティーで断罪されるまで、残り……」

頭の中で記憶を整理する。今の時期はローゼリアが十七歳の冬。学院の卒業パーティーは春。つまり、約三ヶ月。

ゲームの流れは頭に入っている。卒業パーティーで王子フェリクスが聖女ライラとの新たな婚約を発表し、ローゼリアが「ライラを虐め続けた悪役」として断罪される。貴族の地位を剥奪され、家は取り潰され、最終的には処刑される。

咲は少し考えてから、改めて鏡の中の自分を見た。

翡翠の瞳が、静かにこちらを見ている。ゲームのキャラクターのはずなのに、この目は確かに何かを訴えているように見えた。十七年間の記憶が流れ込んでいるせいか、ローゼリアという少女がどんな思いでこの目をしていたか、なんとなく伝わってくる気がした。

まずは、絶対にライラを虐めてはいけない。それどころか、虐めたという証拠を積み上げる行動は何もしてはいけない。次に、王子フェリクスとは適切な距離感を保ちつつ、断罪のための口実を与えないようにする。そして最悪の場合に備えて、逃げ道を確保しておく。

できることをやって、ダメなら逃げる。

現実的な自分の性分が、こんなところで役に立つとは思わなかった。

扉をノックする音がして、「ローゼリア様、お目覚めですか」と声がした。

咲は一呼吸置いて、「入って」と答えた。

入ってきたのは、栗色の髪を後ろでまとめた小柄な少女だった。年は十五か十六といったところ。侍女の制服を身につけ、両手に朝食のトレイを持っている。顔には気遣いと、かすかな怯えの混じった表情があった。

名前は、エルザ。ローゼリアの幼いころから仕えている、数少ない侍女だ。流れ込んできた記憶の中に彼女の顔がある。元のローゼリアはエルザを怒鳴りつけることもあったようで、エルザの緊張はそこから来ているのだろう。細い手がトレイをきつく握っているのが見えた。

「おはよう、エルザ」

できるだけ穏やかな声で言った。

エルザがぴくりと止まった。驚いた様子でこちらをまじまじと見ている。「……お、おはようございます、ローゼリア様。ご体調は……よろしいで

し
よう
か」

「いいよ。ありがとう、持ってきてくれて」

エルザがトレイをサイドテーブルに置きながら、また不思議そうな視線を向けてくる。咲は気にしないふりをして、椅子に座って朝食に手をつけた。スープが温かくて、体に沁みた。野菜と肉の出汁が効いたシンプルな味。それがやけに美味しくて、咲は少し泣きそうになった。

「あの……ローゼリア様」

「なあに」

「何か、ご気分でも優れないのでしょうか。いつもと、少し……」

「少し？」

「お声が、やわらかい気がして。それと……ありがとうございますとおっしゃったのも」

普段のローゼリアは、侍女に礼を言う習慣がなかったのだろう。咲は少し考えてから、エルザに向かって微笑んだ。

「変わったかもしれない。でも悪い方向じゃないと思うから、気にしないで」

エルザはぼかんとした顔をして、それからぺこりと頭を下げた。耳が少し赤かった。

「……はい。ようございます」

小さな声だったけれど、そこに安堵が滲んでいるのがわかった。咲はスーパの続きを飲みながら、この子とは仲良くやれるかもしれないと思った。

午前中は部屋で過ごした。

まず邸内の使用人の配置を頭に入れ、自室の書き物机の引き出しの中を

確認し、ローゼリアの日記帳の存在を確かめた。表紙が革張りで、鍵がついている。鍵は枕の下にあった。

日記には細かい字でびっしりと、憎しみとも悲しみともとれる感情が書き連ねてある。フェリクスへの複雑な想い。学院での孤独。父から向けられる冷たい期待。ライラへの嫉妬。自分が誰にも必要とされていないという、根深い確信。

読んでいると胸が痛くなった。

この子は、十七年間ずっとひとりだったのだと思った。貴族として完璧に振る舞うことを求められ続け、婚約者からは顧みられず、父からは駒としか見られていなかった。それでも懸命に、誰かに愛されようと足掻いていた。悪役になったのは、それだけの理由があった。

日記帳をそっと閉じて、机の引き出しに戻した。

「あなたの代わりに、うまくやるよ」

誰に言うともなくそう呟いた。返事はなかったが、それでいい気がした。

昼を過ぎた頃、父ヴィクトル・ヴァンフォードに呼ばれた。

屋敷の中でも一際重厚な作りの書斎に入ると、五十代の男が窓際に立っていた。白髪混じりの黒髪、鋭い眼差し。ローゼリアの赤みがかった髪は母譲りらしく、父とはあまり似ていない。母はローゼリアが幼い頃に亡くなっており、それ以来父と娘の間に温かみのある会話があった記憶は、流れ込んだ記憶の中を探してもほとんど見つからなかった。

ヴィクトルは咲がソファに座るのを眺めてから、低い声で口を開いた。

「近く、フェリクス殿下との顔合わせがある。月末になる予定だ」

「わかりました」

「くれぐれも粗相のないように。今は殿下のご機嫌を損ねると、それだけで家の名に傷がつく。わかっているな」

「はい、父上」

ヴィクトルは少し眉をひそめた。いつもより素直な娘の返答が、むしろ不審に映っているようだった。探るような目がこちらに向く。しかしそれ以上は何も言わず、「下がれ」と手を振った。

部屋を出て廊下を歩きながら、咲は頭の中でフェリクスのことを思い返した。

ゲームの中のフェリクスは、完璧な王子だった。金色の髪と深い紺色の瞳。冷たいほど整った顔立ち。頭が良く、武芸も優れ、外交手腕も確かで、国中から崇められている。しかし内面は誰に対しても壁を作っていて、心の底を見せない。ライラルートでは彼がライラに惹かれていくにつれて少

しずつほぐれていく様子が丁寧に描かれていたが、ローゼリアルルートというものはそもそも存在しなかった。

そしてその過程で、ローゼリアは切り捨てられる。

フェリクスとは婚約関係にあるが、記憶の中の限り、二人きりで話したことはほとんどない。義務的な顔合わせの場で形式的な会話を交わしたことが数回あるだけだ。元のローゼリアは彼への執着と、見捨てられることへの恐怖を抱えていた。その感情は流れ込んできた記憶の中にじわりと残っていて、思い出すたびに胸の奥が妙に締め付けられる。記憶の中のフェリクスは常に遠く、美しく、少し怖かった。

廊下の窓から、冬の庭を見下ろした。手入れされた枯れ枝に、薄く雪が積もっている。

「好きになっちゃいけないんだけどね」

口に出してしまってから、咲は一瞬止まった。

何を言っているんだろう、と自分で思った。まだ会ってもいないのに。いや、記憶の中では何度か会っているが、それはローゼリアの記憶であって咲の記憶ではない。ゲームのキャラクターの話をしているんだという線引きをちゃんとしておかないと、シナリオの通りに飲み込まれる。

浮かれている場合じゃない。

自分に言い聞かせながら廊下を歩いていると、エルザが向こうから小走りにやってきた。

「ローゼリア様、夕食のご用意が整いました。今夜は温かいシチューをご用意しましたよ」

「ありがとう、エルザ。一緒に行こう」

エルザがまた少し驚いたような顔をして、それからふっと柔らかく笑っ

た。本当に小さな、隠すように微笑む顔だった。今日だけで何度かそういう顔を見た。元のローゼリアはたぶん、この子のこういう顔を知らなかったんじゃないかと思った。

夜になって、咲は机の前に座り、紙を一枚広げた。

そこにゲームのシナリオを思い出しながら、断罪を回避するための手順を書き始めた。一、ライラを虐めない。それどころか、虐めたという状況を作らない。二、フェリクスとの接触を必要最低限にとどめ、余計な感情の揺さぶりを避ける。三、ヴァンフォード家の外に信頼できる人間のつながりを作る。四、いざとなれば王都を離れられるよう、独自の資金と逃げ道を用意する。

書き終えてから、もう一度読み返した。

冷静だ、と自分で思った。我ながら、恐ろしいくらいに冷静だ。

異世界に転生したことへの戸惑いも、十七年分の記憶が突然流れ込んできた混乱も、本当は相当なものがある。胸の奥で何かが揺れているのはわかる。夢の中の自分の部屋が、やかんの音が、同僚の顔が、まだ遠くにあらがする。

でも今は泣いている場合じゃない。

咲はペンを置いて、椅子の背もたれに体を預けた。天井を仰ぐ。豪華な装飾のついた天井は、今日の朝に目を覚ましたときより少しだけ慣れてきた気がした。

窓の外で風が鳴っている。冬の、乾いた音だった。

ふと、ローゼリアの日記の最後のページを思い出した。そこには、インクが少し滲んで読みにくくなった字で、こんな一文が書いてあった。

誰か一人でいい、私のことを見ていてほしい。

咲は目を閉じた。

この子はどこに行っただろう、と思った。魂が入れ替わったというなら、元のローゼリアの魂はどこにいるのだろうか。どこかで眠っているのか、それとも消えてしまったのか。答えはわからない。でもせめて、こちらの世界では彼女が望んでいたようなことが起きればいいと思った。誰か一人に、ちゃんと見てもらえるような結末が。

咲は紙を折りたたんで引き出しの奥に仕舞い、ランプを吹き消した。

部屋がいつぱんに暗くなって、天蓋の向こうで冬の風が窓を揺らした。

「できることをやって、ダメなら逃げる」

布団の中で呟いて、目を閉じた。

しばらくして、深い眠りに落ちた。

月末の顔合わせは、午後二時に設定されていた。

エルザが朝からそわそわしていた。着替えを手伝いながら「今日は特別に念入りに髪を整えましょう」と言い、咲が「いつも通りで大丈夫だよ」と答えると、「ローゼリア様、殿下との顔合わせでございますよ」と少し困った顔をした。その顔がかわいくて、咲は思わず口元が緩んだ。

「わかってる。でも、気負わなくていいよ」

「気負っているのはわたくしではなく……いえ、失礼いたしました」

エルザが慌てて口をつぐんだ。咲が「続きを聞かせてよ」と言うと、エルザはおずおずと「ローゼリア様が、でございます」と俯いた。

咲は鏡の前で大人しく髪を結ってもらいながら、そうかもしれないな、

と思った。氣負っていないつもりで、実は緊張している。今日の方針は頭の中で何度も確認していた。三ヶ月後の断罪を回避するためには、フェリクスに余計な感情を持たせてもいけないし、自分も余計な感情を持つてはいけない。うまく距離を保ちながら、印象を悪くせず、しかし深入りせず。言葉にすると簡単そうで、実際にやるのは難しい綱渡りだ。

余計なことを言わない。余計な感情を見せない。適切な礼儀を保ちつつ、波風を立てずに終わらせる。それだけでいい。

ドレスは深いエメラルドグリーンのもので選んだ。エルザが「いつもはもっと華やかなお色を」と言いかけたが、咲は「これがいい」と穏やかに押し切った。派手に着飾って目立つ必要はない。殿下に余計な印象を植え付けたくなかった。

馬車で王宮へ向かう道中、咲は窓の外を流れていく王都の景色を眺めた。

石畳の街並み。赤い屋根の並ぶ商店街。行き交う人々の息が白く煙っている。冬の空は低く、雲が厚かった。

ゲームで見た王都の絵とほとんど同じだった。でも、実際に目で見るとずっとずっと細部がある。パン屋の前で立ち止まった老婆の背中とか、石畳の隙間に生えた枯れ草とか、子どもが走り抜けていく足音とか。ゲームにはないものが、そこかしこにある。

ここは本物の世界なんだ、と改めて思った。馬車が石畳の段差を越えるたびに体が揺れる。その揺れが、ゲームの画面越しに見ていた王都を、確かに肌のある現実として感じさせた。

王宮の謁見の間は、天井が驚くほど高かった。

白と金で統一された内装に、深紅の絨毯が中央を一直線に貫いている。

天井から巨大なシャンデリアが下がり、冬の鈍い光の中でそれなりに輝いていた。咲はヴィクトルの後ろに続いて入室し、定められた位置に立った。

向こうから入ってきたのは三人だった。

側近らしき男が二人。そして、その中央に。

ゲームで見た通りの人間が、そこにいた。

金色の髪。深い紺色の瞳。背が高く、肩幅があり、動きに一切の無駄がない。顔立ちは整いすぎていて、最初は造り物みたいに見えた。しかし近づいてくるにつれて、それが本物の人間だとわかった。わずかに上がった口角。静かな、けれど何かを測るような眼差し。

フェリクス・アルダーン第一王子。

咲はドレスの裾をつまんで礼をした。完璧な所作で、と記憶の中にある礼儀作法を引っ張り出しながら。

「ローゼリア嬢」

低い声だった。想像していたより柔らかく、けれど静かな圧を持った声だ。

「殿下、本日はお時間をいただきありがとうございます」

咲は顔を上げた。

フェリクスがこちらを見ていた。

ゲームで見たキャラクターのはずなのに、視線が合った瞬間に妙な感覚がした。重さがある視線だった。ただ表面を見ているのではなく、もつと奥を見ようとしているような、そういう目。

「お久しぶりです」と咲は続けた。

「そうだな」とフェリクスは答えた。それだけだった。

形式的な会話がいくつか交わされた。父ヴィクトルとフェリクスの側近

の間でも言葉が行き交い、咲はほとんど口を開かなかった。それで問題なかった。令嬢は大人しく控えていればいい。

話が一段落し、少しの間ができた。

ヴィクトルと側近が書類について確認をし始め、フェリクスと咲が取り残される形になった。

咲は内心「まずい」と思ったが、表情には出さなかった。

「変わったな」

突然、フェリクスが言った。

低く、静かな声だった。他の者には届かない音量で。

咲は一瞬固まってから、「と、おっしゃいますと」と返した。

「目が」とフェリクスは言った。「以前とは違う」

咲の心臓が、ひとつだけ大きく跳ねた。

ゲームの攻略知識を持つ咲には、フェリクスがどれだけ観察眼の鋭い人物かわかっていた。頭がいいだけでなく、人間を見る目がある。それがライルルートでも随所に描かれていた。

しかしまさか、たった一言で気づかれるとは思っていなかった。

「……そうでしょうか」

「ああ」

それだけ言って、フェリクスは視線を父たちの方へ戻した。咲への興味が消えたわけではなく、むしろ何かを確認したような、そういう横顔だった。

咲はそっと息を吐いた。

帰り際、庭を経由することになった。

王宮の中庭は冬でも美しかった。常緑の低木が左右に並び、中央の噴水は寒さで細く絞られた水を吐き出している。石畳の通路を歩きながら、咲は少し先を歩くヴィクトルの背中を見ていた。

角を曲がったところで、ヴィクトルが立ち止まって側近の一人と書類の確認を始めた。咲は少し離れた場所待つことにして、噴水の近くに移動した。

冬の空気が頬に冷たい。

手袋越しでもわかるくらい、手先が冷えていた。咲は両手を合わせて温めながら、噴水の水音を聞いた。こんな寒い時期でも水が流れているのは、魔法で凍結を防いでいるからだ、と、記憶が教えてくれた。低木の葉が風に揺れるたびに、積もった細かな雪の粒がはらはらと落ちた。静かで、きれいだった。現代日本には絶対にならない景色だ、と思った。

ふと、手のひらを開いた。

自分でも理由はうまく説明できないが、転生してからずっと気になっていたことがある。ローゼリアは「無属性」として魔法が使えないとされていたが、記憶の中に奇妙な感覚がある。何かを探っているような、何かに触れようとしているような、微かな感覚。

試してみようと思った。

手のひらに意識を集中させる。ゲームでは魔法は「紋章を介した属性制御」として描かれていたが、実際には感覚で引き出す部分の方が大きいらしい、と記憶の中の魔法の授業が教えてくれていた。

しばらく集中していると、指先に微かな温もりが生まれた。

小さな光が、手のひらの上に灯った。白に近い、ほんのかすかな光。すぐに消えたが、確かにそこにあった。

「……へえ」

咲は思わず声を漏らした。使えるじゃないか。

「何をしている」

真後ろから声がした。

咲は振り返った。そこにフェリクスが立っていた。いつの間に來たのか、心配がまったくなかった。

「……殿下」

「護衛を撒いて一人でいるのは感心しないが」フェリクスは咲の手元に視線を落とした。「今のは何だ」

「何でもありません。少し試していただけです」

「魔法か」

咲は答えるかどうか一瞬迷って、「そのようなものです」と曖昧に返した。

フェリクスが一步近づいてきた。咲は反射的に半歩退いてしまつて、自分でその行動に驚いた。

「無属性のはずだな、お前は」

「……はい」

「だが今のはそうは見えなかった」

フェリクスの眼差しが、また先ほどのあの目になった。奥を見ようとすると、測るような視線。咲はその目に見られると、なぜか背筋が落ち着かなくなる感覚があつた。見透かされそうで、困る。

「気のせいかと思ひます」と咲は言つた。

「俺は気のせいをあまり信じない」

短く、それだけ言つた。咲が返答に迷っていると、ヴィクトルが書類の確認を終えてこちらに歩いてくるのが見えた。フェリクスはすつと視線を

外し、自然な動作でその場から退いた。

去り際、こちらを一度だけ振り返った。

何かを言いかけて、やめたような顔だった。

帰りの馬車が王宮の門を出た。

座席のクッションに体を預けながら、咲は静かに息を吐いた。ヴィクトルは向かいの席で書類を広げており、咲のことなど意識していない。窓の外では日が傾き始めていて、街並みが橙色に染まっていた。朝とは違う顔の王都だった。

馬車に乗って帰路につきながら、咲は窓の外を見るふりをして頭を整理した。

二つ、予想外のことがあった。

一つ目は、「目が変わった」と言われたこと。

記憶の中のローゼリアはフェリクスとほとんど目を合わせようとしなかった。怖かったから。見捨てられることが怖くて、直視できなかったから。それが変わったのだと思う。咲には怖さよりも先に「観察しよう」という意識があるので、自然と目が合う。その差を、フェリクスは一度で拾い上げた。

二つ目は、魔法のこと。

手のひらの上に灯ったあの光を、フェリクスが見ていた。目が合った瞬間の彼の表情を思い出す。驚いたというより、予感が当たったとでも言いたげな顔だった。まるで最初から何かを知っていたかのような。

咲は頬に手を当てた。冷えた指先が、頬の温かさに気づく。

頬が、少し熱かった。

「ダメだダメだダメだ」

小声で呟いた。ヴィクトルが「何か言ったか」と眉を上げたので、「何でもあります」と首を振った。

感情に引っ張られてはいけない。あの人はゲームのキャラクターで、自分は断罪される悪役令嬢で、三ヶ月後のことを考えなければならない。
でも。

窓の外を流れていく冬の街並みを見ながら、咲は先ほどのフェリックスの横顔を思い出した。あの去り際の、言いかけてやめたような顔を。

あの時、彼は何を言おうとしていたのだろう。

わからない。ゲームの中にも、あんな場面はなかった。

咲は目を閉じた。どこかで水音がしている。噴水の音じゃなく、雪解けの水が石の上を流れるような音だった。

邸に戻ってから、咲は自室に籠ってゲームの記憶を片端から掘り起こした。フェリクスがどんな場面で誰に何を言ったか、どういう行動をとる人物か、細部まで思い出そうとした。

しかしいくら掘り起こしても、今日の彼はゲームの中のフェリクスとは少し違う気がした。

もしかしたら、シナリオは既に少し変わり始めているのかもしれない。その可能性に気づいた瞬間、咲の胸の中で何かが揺れた。希望とも恐怖とも言えない、曖昧な揺らぎ。

あの目が頭から離れない。

「……まづいなあ」

誰もいない部屋で、咲は一人呟いた。

その夜、エルザが夕食の片づけをしながら、遠慮がちに口を開いた。

「今日の殿下はいかがでしたか」

咲は少し考えてから、「思っていたのと少し違った」と答えた。

「違った、とは」

「もっと、話しかけてこない人だと思っていた。もっと……遠い人だと」

言いながら、自分でも少し驚いた。記憶の中のフェリクスは確かに遠かった。近くにいても、どこか霞がかかったように遠かった。でも今日の彼は、そうじゃなかった。距離はあった。でも存在が、確かにそこにあった。

エルザがくすりと笑った。珍しく遠慮なく笑う顔で、「殿下は昔からローゼリア様のことをよくご覧になっているとは聞いておりましたけれど」と言った。

咲は眉を上げた。

「そうなの？」

「はい。幼い頃の顔合わせのとき、殿下がローゼリア様の魔法の練習をご覧になっていたと……侍女仲間から聞いたことがあります。あくまで噂ですけれど」

咲はその話を頭の中に仕舞った。

ゲームにはなかった情報だった。エルザの話が本当なら、フェリクスは昔から何かしらローゼリアを意識していたことになる。

だとすれば、今日の「目が変わった」という言葉は、相当な観察の積み重ねの上に出たものだ。

咲は布団に入ってから、長い間天井を見つめていた。

シャンデリアが消えて、部屋は暗い。窓から月明かりだけが差し込んでいる。それが天蓋のレースに当たって、複雑な影を落としていた。

断罪まで三ヶ月。できることをやって、ダメなら逃げる。その方針は変わらない。変えてはいけない。今日だって予定通りに振る舞えた。余計なことも言っていない。及第点の顔合わせだったはずだ。

なのに。

布団の中で、咲は手のひらを顔の前に持ち上げた。暗くてよく見えないが、あの光が灯った手だ。フェリクスに見られた手。

彼は「無属性のはずだな」と言った。記憶の中のローゼリアはずっとそう言われてきた。魔力が弱い、使えない、令嬢としての価値が低い。それが彼女の劣等感の一つだった。

でも実際には、あの光が灯った。

フェリクスはそれを見た。そして何かを言いかけて、やめた。

あの顔が頭から離れない。言いかけた言葉が、どうしても気になった。

断罪まで三ヶ月。できることをやって、ダメなら逃げる。その方針は変わらない。変えてはいけない。

でも今日、フェリクスと目が合ったあの一瞬の感覚が、どうしても消えてくれなかった。

新学期が始まったのは、顔合わせから十日後のことだった。

王立学院は王都の北側、緩やかな丘の上に建っている。白い石造りの校舎が幾棟も連なり、それを囲む広大な敷地には演習用の魔法場や馬場、図書館の別棟まである。貴族の子弟が通う学院だけあって、何もかもが大きく、重く、古い。

咲は馬車を降りながら、思わず見上げた。

ゲームの中のイラストで何度も見た建物が、目の前にある。空の青さも、石の白さも、ゲームよりずっと鮮明だった。風が吹いて、咲の赤い髪がさらりと流れた。

エルザが後ろから「お氣をつけて」と声をかけてくれた。咲は「うん、行ってくる」と返して、正門をくぐった。

学院の廊下は広い。天井が高く、床は磨かれた石で、歩くたびにコツコツと音が立つ。登校してくる生徒たちが左右を歩いていて、咲の姿を見ると視線が集まった。そしてすぐに逸らされる。

噂が広まっているのはわかっていた。ローゼリアが変わった、という話は侍女たちの間でも囁かれているらしいし、学院の生徒たちの耳にも届いているはずだ。好奇の目と、警戒の目と、困惑の目が混じった視線を背中に受けながら、咲は廊下を歩いた。

午前中の授業は魔法概論と歴史学だった。座って話を聞いているだけだから特に問題はない。隣の席の令嬢が何度かこちらの様子を窺ってきたが、咲は静かに板書を写し続けた。元のローゼリアは授業中に堂々と内職したり私語をしたりしていたらしく、真面目に授業を受ける咲の姿がまた「変わった」という話の種になっているらしかった。

目的の教室に向かう途中だった。

廊下の角を曲がったところで、声が聞こえた。

「……申し訳ありません、わたくし、急いでいて」

「急いでいる？ 面白いことを言う。この廊下が誰のものか、知らないのか？」

咲は足を止めた。

声のする方を見ると、廊下の壁際に小柄な少女が追い詰められていた。薄い金色の髪、丸い青い瞳、質素だが清潔な制服。そして彼女を囲んでいるのは三人の令嬢だった。いずれもローゼリアの取り巻きだと、記憶が告げている。

そして追い詰められている少女が誰か、咲にはわかった。

ライラ・フォスター。このゲームのヒロイン。聖女の力を持って学院に転入してきた少女。フェリクスを含む攻略対象たちが次々と惹かれていく、物語の中心にいる人物。

ゲームのシナリオでは、こういう場面でローゼリアが登場して虐めを主導するはずだった。または黙認する。どちらにしても、のちの断罪の理由になる場面だ。

咲は一秒だけ考えた。

介入すれば、取り巻きたちとの関係が変わる。ローゼリアの取り巻きというのは、彼女の権力に便乗していた連中だ。突然態度が変われば離れていくかもしれない。それはむしろ好都合だと思った。

「何をしているの」

咲は声に出して、三人の令嬢の方へ歩いた。

三人が振り返った。そしてローゼリアだと気づいた瞬間、ほっとしたような顔をした。仲間が来た、と思ったのだろう。

「ローゼリア様、ちょうどよかったです。この転入生が――」

「どいて」

三人が固まった。

咲はもう一度「どいて」と繰り返した。声は穏やかだったが、有無を言わせない響きがあったと思う。三人は顔を見合わせ、おずおずとライラの

前から退いた。

ライラが、きよとした顔でこちらを見ていた。

丸い目。桜色の頬。怯えているかと思つたが、そこまでではない。むしろ状況を把握しようとしているような、賢い目をしていた。ゲームの中では天真爛漫に見えたが、実際に見ると、なかなか観察眼がある顔だと思つた。

「怪我はない？」

咲が聞くと、ライラは小さく首を振つた。

「はい、おかげさまで。ありがとうございます」

「気をつけて。行っていいよ」

ライラがもう一度お礼を言つて、小走りに廊下を去つた。その背中を見送ってから、咲は三人の取り巻きに向き直つた。

「今後、誰かをあんなふうに囲むのはやめて。みつともない」

三人が何も言えないでいる間に、咲は教室に向かって歩き出した。

廊下が静かになった。

咲は一度深呼吸してから歩き出した。取り巻きたちは自分についてくるでもなく、ぽつんとその場に残っていた。たぶんしばらくは混乱するだろう。場合によっては離れていくかもしれない。それでいい。元のローゼリアにとっての「取り巻き」は、彼女の力に寄り添っていただけで、本当の意味で味方だったわけではない。記憶の中の彼女たちの顔は、媚びと計算と、かすかな侮蔑が混じっていた。

午前の授業が終わり、昼食の時間になった。

ローゼリアが使っていた食堂の指定席に座り、エルザが用意してくれた

弁当を広げながら、咲は静かに周囲を観察した。あの場面は思いのほか目立ってしまった。廊下を通りがかった生徒も何人かいたはずで、ローゼリアがライラを助けたという話は既に広まっているだろう。

望んでいた以上に目立ってしまった。

でも後悔はなかった。あのまま見て見ぬふりをする方が、胃が痛かったと思う。

午後の授業もつつがなく終わり、咲は図書館の別棟に向かった。魔法の理論書を探すためだ。手のひらに灯ったあの光の正体を調べたかった。ゲームでも文献でも「無属性」とされていたローゼリアが、なぜ魔法を使えるのか。使えるとしたら、それは何の魔法なのか。

図書館は静かだった。

高い書棚が幾列も並び、窓から差し込む西日が埃っぽい光の柱を作って

いる。司書の老人がカウンターで居眠りをしていた。咲は魔法理論の棚を見つけ、背表紙を指でなぞりながら目当ての本を探した。

「珍しい」

声がして、咲は振り返った。

書棚の端、窓際の椅子にフェリクスが座っていた。本を手になっている。いつからいたのか、まったく気づかなかった。

「殿下」

「図書館に来るとは思わなかった」

「お邪魔でしたか」

「そうは言っていない」

フェリクスは本に視線を落としたまま答えた。咲はどうしようか一瞬迷ってから、邪魔しないよう元の棚に向き直った。護衛らしき人影が扉の外

にあるのが見えたが、室内には二人しかいない。

本を一冊引き抜いて、近くの椅子に座った。ページをめくる。魔力属性の分類と特性について書かれた古い本だった。文字が細かく、ところどころ古語が混じっている。

「今朝の話を聞いた」

フェリクスが言った。

咲は顔を上げなかった。「何でしょう」

「ライラ嬢のことだ。お前が助けたと、複数から聞いた」

「通りがかっただけです」

「ローゼリア嬢が通りがかるには、都合が良すぎる場面だったと思うが」

咲は本のページを一枚めくった。

「都合がいいとおっしゃるなら、そうかもしれません。でも、みつともな

いものを見ると止めたくなる性分で」

フェリクスがわずかに間を置いた。

「性分」

「はい」

また間があった。今度は少し長かった。咲はページの活字を目で追いな
がら、フェリクスの気配を意識していた。彼がこちらを見ているのがわか
る。

そしてフェリクスが、笑った。

声を立てて笑うのではなく、静かに、口角が上がるだけの笑い方だった。

でも咲はそれを本の上端から視界の端で見て、思わず顔を上げた。

確かに笑っていた。ゲームの中では何度も見た表情のはずなのに、本物
の人間がするそれは、想像よりずっと温度があった。形の良い口元が少し

緩んで、硬かった目元が和らいで、そのたった数秒の変化が、あまりにも鮮明に見えてしまった。

「何かおかしいですか」と咲は聞いた。

「いや」とフェリクスは答えた。「面白いと思ったただけだ」

「私が？」

「お前が」

咲は視線を本に戻した。顔が少し熱い気がしたが、気のせいだと思うことにした。

「殿下は、何をお読みで」

「外交の記録だ」

「お好きなんですか、そういったものが」

「好き嫌いより必要だから読む。お前は？」

「魔法の理論書です」

フェリクスが少し間を置いた。「また魔法か」

「気になることがあって」

「この間の光のことか」

咲は少しだけ迷って、「そうです」と答えた。隠しても意味がない気がした。見られていたのだから。

「調べて、わかったか」

「まだです。ちょうど今日探し始めたところで」

フェリクスが立ち上がった。咲が思わず顔を上げると、彼は迷わず書棚の列奥に入っていく、迷いなく一冊を引き抜いて戻ってきた。咲の前にそれを差し出す。

「こちらの方が詳しい。属性の分類ではなく、魔力の性質そのものについて

て書かれている」

咲は受け取って、表紙を見た。古い本で、背表紙の文字が掠れていた。

『魔力の根源と調和』と書いてある。

「……詳しいんですね、殿下」

「一通りは」とフェリクスは答えた。「特に、希少な魔力の系統については」最後の一言に、咲は何かを感じた。含みのある言い方だった。しかしフェリクスはそれ以上何も言わず、元の席に戻って本を開いた。

咲は受け取った本のページを開いた。

しばらく二人で、静かに本を読んだ。窓から差し込む光が少しずつ傾いていき、図書館の中が橙色に変わっていった。居眠りしていた司書が時々寝返りを打つ音がした。フェリクスがページをめくる音がした。外で鳥が鳴いた。

ライラが去った方向をしばらく目で追ってから、咲は視線を戻した。ゲームの中のライラはもつと純粹に被害者然としていたが、実際に会つてみると、むしろ芯の通った目をしていた。弱いから助けを求めているのではなく、状況を正確に把握した上で動ける人間だという気がした。それはそれで、少し安心した。こちらが介入しなくても、うまくやれるかもしれない。

不思議と、居心地が悪くなかった。

咲は本の文字を追いつながら、そのことに気づいて少し驚いた。フェリクスと二人きりだというのに、緊張よりも静けさの方が大きい。それは、彼が無理に話しかけてこないからかもしれない。ただそこにいて、ただ本を読んでいる。その在り方が、妙に落ち着いていた。

日が傾き、片づけの時間になった。咲が本を戻しに立ち上がると、フェ

リクスも立ち上がった。

「送ろう」

「結構です」

「護衛が外にいる。どうせ同じ方向だ」

咲は断る言葉を探したが、見つからなかった。「……お気遣いなく、ありがとうございます」と言うと、フェリクスが無言で扉を開けた。

廊下を並んで歩きながら、咲は借りた本のことを考えた。『調和』という言葉が気になっていた。「特に希少な魔力の系統については」という言葉が気になっていた。

フェリクスは何かを知っているのかもしれない。

「殿下」

「何だ」

「先ほどの本、なぜこちらに教えてくださったんですか」

フェリクスが少し間を置いた。咲の方を見た。その目が、また例の目になった。

「お前が調べたいことの答えが、たぶんそこにある」

それだけ言って、廊下の角で「ここで戻る」と足を止めた。護衛が一人ついてきているから大丈夫だ、ということらしい。

咲は礼を言って、角を曲がった。

一人になってから、胸の中の揺れに気づいた。

心臓が、少し速い。

「ダメだってば」

声に出して、自分に言い聞かせた。廊下を歩く生徒が振り返ったが、咲は気にしないふりをして足を速めた。

その夜、借りてきた本を読み込んだ。

ランプの明かりの下で、ページを一枚一枚めくる。難解な古語が混じっているが、ローゼリアの記憶に残っている語学の知識でなんとか読める。

調和魔法、という言葉に出会ったのは、半分ほど読み進めたあたりだった。

それはすべての属性を微量ずつ扱える、極めて稀少な魔力の性質だと書かれていた。属性が一つに定まらないために「無属性」と誤認されることが多く、歴史上でも確認されているのは数例しかないという。そして最も重要なこととして、「調和魔法の使い手はしばしば世界の均衡に関わる役割を担う」と記されていた。

咲はその一文を何度も読み返した。

フェリクスが「希少な魔力の系統」と言ったとき、これを指していたの

だとわかった。ではなぜ彼がそれを知っているのか。ローゼリアが調和魔法の使い手だと、既に気づいていたということなのか。

わからないことが増えた。

でも、一つだけはつきりした。

ローゼリアはゲームの設定とは違う何かを持っていて、フェリクスはそれをずっと前から見ていた。

もう一つ、気になる記述があった。

調和魔法の使い手には「番（つがい）」と呼ばれる存在が引き寄せられることがある」という一文だ。魔力の均衡を補完し合う相手を、体が本能的に感知するのだという。具体的に何を意味するのかは曖昧な書き方で、学術的に証明されているわけではないとも注釈があった。

咲はそこを指で押さえながら、しばらく考えた。

意味するところはわからない。でも頭の片隅に引っかかった。

咲はランプを吹き消した。暗くなった部屋で、天井を見上げた。

断罪まで、あと二ヶ月半。

呼び出しの手紙が届いたのは、学院の新学期が始まって三日後のことだった。

差出人はフェリクス。内容は短く、「明日の午後、執務室へ来い。話がある」とだけ書かれていた。

咲は手紙を三回読んで、机の上に伏せた。

話がある。その四文字が何を意味するのか、いくら考えてもわからなかった。断罪の予告では、さすがにまだ早い。先日図書館のことについて

て、何か改めて言いたいことがあるのか。あるいは学院でのライラの件について、正式に何か言葉があるのか。

どれもじっくりこなかった。

エルザは手紙を見て「まあ、殿下から直々に」と少し上ずった声を出した。咲は「大したことじゃないと思うよ」と言ったが、エルザはそれを信じなかったらしく、翌朝から念入りに身支度を整えようとした。咲は「いつも通りで」と押しとどめながら、やはり少し緊張していることに気づいた。

夜、布団の中でゲームの記憶を掘り返した。フェリクスが婚約者であるローゼリアを執務室へ呼び出す場面は存在しなかった。ライラを選んだ後に縁を切る場面はあった。でも今はまだそのタイミングではない。ということやはり、別の理由がある。

考えても答えが出ないまま、朝になった。

王宮の廊下は午後の光を受けて白く輝いていた。

フェリクスの執務室は王宮の東翼にある。案内の文官についていきながら、咲は廊下を歩いた。窓の外に中庭が見える。先日魔法を試みた噴水が、今日も静かに水を吐いている。足音がコツコツと石畳に響く。緊張を悟られないよう、背筋を伸ばして、表情を整えた。

扉の前で文官が止まり、「ローゼリア・ヴァンフォード嬢をお連れしました」と部屋の中に声をかけた。

中から「入れ」と低い声がした。

咲は一度だけ息を整えて、扉を開けた。

執務室は、思っていたより狭かった。

広大な王宮の一室だから広いかと思っていたが、壁一面を書棚が埋め尽くしているせいで、むしろ圧迫感がある。書類の山が几帳面に積まれた執務机の前に、フェリクスが座っていた。咲が入ってくると、手にしていた書類を置いて立ち上がった。

「来たか」

「呼ばれましたので」と咲は答えた。

フェリクスは机を回り込んで、室内の小さなソファセットの方へ歩いた。

「座れ」と言う。咲は言われた通りソファに腰を下ろした。フェリクスは向かいに座るかと思ったが、そうはせず、ソファの横に立ったまま咲を見下ろした。

「護衛と侍女は廊下で待たせてある。ここには俺とお前だけだ」

「……はい」

咲の胸の中で、微かな警戒と、それとは別の何かが揺れた。二人きりというのは、ゲームの中でも今まで学院の図書館しかなかった。しかもあのときは偶然だった。今度は意図して、二人きりにしている。

部屋を見渡した。書棚の本の背表紙はどれも古く、大半は国政か魔法理論に関わるものに見えた。窓際の小卓に一輪の花が挿してある。白い、小さな花だった。こんな部屋に花を飾るような人間なのか、と思って少し意外だった。

「話、というのは何でしょう」

咲は先に口を開いた。沈黙のまま待っていられたなかった。

フェリクスが咲を見た。その目が、いつもの測るような眼差しだった。

しかし今日はそこに、何か別のものが混じっている気がした。

「お前が変わってから、ずっと目が離せない」

静かな声だった。

咲の思考が一瞬、止まった。

「……殿下」

「最初に気づいたのは顔合わせのときだ。目が違う、と言っただろう。あれから三週間、見るたびに確信が強くなった」

「それは……」

「好きだとか嫌いだとか、そういう話をするつもりはない」とフェリクスは言った。「ただ、事実として、お前から目が離せなくなっている。それはお前に知っておいてほしい」

咲は何も言えなかった。

頭の中でゲームのシナリオを探した。こんな場面はなかった。フェリクスがローゼリアに「目が離せない」などと言う場面は、どのルートにも存

在しなかった。

シナリオから外れている。完全に、外れている。

それがわかって、咲の胸の中で何かがほどけるような感覚があった。恐怖でも安堵でもなく、もっと曖昧な、どこへ向かえばいいかわからない感情だった。

フェリクスが一步近づいた。

咲は思わず顔を上げた。フェリクスが手を伸ばして、咲の顎のあたりに指先が触れた。触れた、というより添えた、という感じだった。強引ではなく、確かめるような触れ方だった。

「嫌か」

低い声で問われた。

咲は答えられなかった。嫌ではない。嫌ではないのが問題なのだ。でも

その言葉が出てこなかった。フェリックスの指先が顎から頬へ移動して、そのまま止まった。

フェリックスが、顔を近づけてきた。

ゆっくりと、逃げ場を与えるように。

唇が触れた。

柔らかかった。予想していたより、ずっと。

数秒の後、フェリックスが少し離れた。咲の顔を見る。

「嫌だったか」

咲はしばらくしてから、首を横に振った。

フェリックスの目が、微かに和らいだ。そしてもう一度、今度は少し深く、唇が重なった。フェリックスの手が頬から髪へ移動して、咲の頭を支えるように触れた。大きな手だった。温かった。

息が上がりそうになって、咲はフェリックスの胸元に手をついた。突き放すためではなく、支えを探すような動作だった。フェリックスがそれに気づいて、咲の背中に腕を回した。

唇が離れた。

咲は目を開けた。フェリックスの顔が近くにある。近すぎて、その目の色が深い紺色だということがはっきりわかった。

「来い」

フェリックスが静かに言って、咲の手を引いた。

執務室の奥、重厚な扉の向こうに続く部屋があつた。フェリックスの私室だった。咲が一步踏み入ると、窓から夕方の淡い光が差し込んでいた。大きなベッドが部屋の中央にある。天蓋はなく、深い青のベッドカバーが整然とかかっていた。

咲はベッドの前で立ち止まった。フェリクスが後ろから咲の肩に触れ、そのまま髪を払った。うなじが露になる感覚がして、咲は小さく息を呑んだ。

フェリクスの唇が、うなじの後ろに触れた。

「ふ……」

思っていたより声が出た。咲は慌てて口を押さえた。フェリクスが低く笑う気配がした。温かい息がうなじにかかる。

「手をどけろ」

耳元に唇を寄せながら言う。低い声が耳に直接届いて、背筋に細かな震えが走った。鎖骨から肩にかけてフェリクスの唇がゆっくりと移動して、その場所に熱が残った。咲は立っているのがやっとで、フェリクスの腕に手を置いた。

「……殿下」

「フェリクスと呼べ」

咲は返事ができなかった。フェリクスの手がドレスの背中のボタンに触れ、一つ一つ、ゆっくりと外していく。急がない。丁寧な手つきだった。それがかえって、咲の緊張を高めた。

「緊張しているな」

「……当然です」

「俺もだ」

その一言に、咲は少し驚いた。振り返ろうとすると、フェリクスの手が肩を押さえた。「動くな」と言われて、咲は前を向いたまま立っていた。

ボタンが全て外れた。ドレスが肩から滑り落ちる。床に落ちる音が、静かな部屋に響いた。

フェリクスの手が咲の肩甲骨の間に触れて、そのまま背中を撫でた。ゆっくりと、確かめるように。その感触が背中から腰へ降りていく。咲の呼吸が少し乱れた。

肩を向き直らせられた。フェリクスが咲を正面から見た。その目がいつもより深く、咲を見ていた。

「綺麗だ」

短く、低い声で言われた。

咲の頬が熱くなった。「そんな……」と言いかけると、フェリクスが指先で咲の唇に触れて、それ以上の言葉を止めた。

「素直に受け取れ」

咲はそれ以上何も言えなかった。ローゼリアとして十七年生きてきた記憶の中に、誰かに綺麗だと言われた記憶がない。父は娘を駒としか見てい

なかったし、フェリクスは遠かった。だからこの言葉がどこに着地すればいいのかわからない。でも、体は正直だった。

フェリクスの手が咲の肩から鎖骨へ、鎖骨から胸元へと降りてくる。下着越しに胸に触れて、そのまま包むように手を重ねた。

「んっ……」

声が漏れた。フェリクスがその声に反応して、親指を動かした。下着越しでも、乳首の存在がはっきりとわかる触れ方だった。咲は奥歯を噛んで声を堪えようとした。

「声を堪えなくていい」

「で、でも」

「聞きたい」

それだけ言って、フェリクスが下着を下げた。

咲の胸が露になった瞬間、フェリクスの視線がそこに落ちた。その目が静かな熱を帯びているのが、見なくてもわかった。

「白い」

呟くように言って、フェリクスの顔が胸元に近づいた。唇が乳首に触れた瞬間、咲の腰が小さく揺れた。

「あっ……」

柔らかく、吸われた。舌先が乳首の先端をなぞる。それだけで体の奥に電気が走るような感覚があつて、咲は思わずフェリクスの肩に手を置いた。

「ふぁ……やっ……」

フェリクスは急がない。片方の乳首を丁寧で舌で転がしながら、空いた方の手でもう片方をそっと摘んだ。指先が柔らかく押し込むように動いて、咲の口から小さな声が続けて零れた。

「んっ♡ あ……フェ、リクス……っ」

気づいたら名前を呼んでいた。

フェリクスの動きが一瞬止まった。顔を上げて、咲を見る。その目が、これまで見たどの表情とも違った。抑えているものが滲み出ているような、そういう目だった。

「もう一度呼んでみろ」

低い声だった。命令なのに、懇願に近かった。

咲は息を整えながら、「フェリクス」と呼んだ。

フェリクスが目を細めた。そして再び咲の胸元に顔を埋めた。今度はさつきより熱心に、もう片方の乳首を口に含んだ。咲の背中がしなった。

「あっ♡ ん……♡ あ、そこ……っ」

フェリクスの手が脇腹を伝って腰へ降り、最後の下着に触れた。その手

がゆつくりと中へ入ってくる。咲の内腿が震えた。

「もう濡れてる」

耳元で低く言われて、咲は羞恥で頭が熱くなった。

「言わないでく……っ、ん♡」

言い終わる前に、フェリクスの指が動いた。秘所の奥を探るように、ゆつくりと。咲の腰が思わず動いた。

「ふあっ♡あ……あっ、んっ……♡」

声が止まらなかった。フェリクスの指の動きに合わせて、体が勝手に反応する。頭の中が白くなりかけて、咲はフェリクスの肩にしがみついた。

フェリクスが咲をベッドに横たえた。

夕方の光が窓から差し込んで、フェリクスの金色の髪を縁取る。咲はその光の中の顔を見上げながら、これがシナリオの外にある現実だということこ

とを、ぼんやりと思った。

フェリクスの手が再び動き始めた。

指が秘所の入り口をゆっくりとなぞる。咲の腰がまた動いた。

「んっ……♡ あ……っ」

秘所がどんどん潤んでくるのがわかる。恥ずかしくて、でも止められない。フェリクスの指の動きは急がなかった。焦らすように、じっくりと咲の体の反応を確かめながら進む。その丁寧さが、かえって咲の頭を蕩けさせた。

「あっ♡ ふっ……そこ……っ」

特に敏感なところを見つけると、フェリクスはそこを繰り返し触れた。

咲の声が一段高くなる。

「んっ♡ んん……♡ や……っ、ダメっ……フェリクス……っ♡」

「ダメじゃない」低い声が耳元で言った。「もっと聞かせろ」

「あっ……♡ あ、あっ……んっ♡」

指の動きが少し深くなった。咲の背中がしなって、シーツを掴む手に力が入った。

「はあっ♡ ん……んんっ♡ もう……っ」

体の奥が波打つように収縮し始めた。フェリクスがそれを感じ取って、指を少し速めた。

「あっ♡ あっ♡ や……いく……っ、ん……っ♡♡」

咲は小さく声を上げて、体を震わせた。フェリクスがその波が引くまで指を動かし続けて、それからゆっくりと手を止めた。

咲は乱れた息を整えながら、天井を見た。

夕方の光が橙色に変わっていた。どれだけ時間が経ったのかわからない。

体が熱くて、頭がうまく動かない。

フェリクスが咲の隣に身を落として、横から見下ろした。その表情は読めないが、目の奥に何か温かいものがある。

「続きは？」

咲は少し間を置いてから、「……殿下の好きにしていいます」と言った。声が掠れていた。

フェリクスが静かに目を細めた。

咲は目を閉じた。このまま流されているのか、という理性の声が、どこか遠くに聞こえた。でもフェリクスの手の温かさが、その声をじわじわと押し流していく。

シナリオは既に外れている。ならば、今夜この部屋で起きることも、ゲームの中には存在しない何かだ。

それが、今は少しだけ怖くなかった。

フェリクスの手が咲の腰を引き寄せた。ゆっくりと、しかし確かに。

「俺のものになれ」

低く、静かな声だった。命令でも懇願でもなく、ただ事実を告げるような声だった。

咲は目を開けて、フェリクスを見た。その顔が、夕方の橙色の光の中でやけに近かった。

フェリクスの指が、秘所の奥をゆっくりと探り始めた。

咲はシーツを握りしめた。夕方の橙色の光が天井を染めていて、その中でフェリクスの金色の髪が輝いて見えた。美しいと思う余裕が、頭のどこ

かにまだあった。でもそれもじわじわと溶けていく。

「あっ……♡んっ……」

フェリクスの指の動きは急がない。秘所の内側を丁寧になぞって、咲の反応を確かめながら進む。ここが好きか、ここはどうだ、と言葉ではなく指先で問いかけてくるような動き方だった。

「ん……っ♡そこ……っ、あっ♡」

「ここか」

低い声が耳元で言った。フェリクスの指が同じ場所を繰り返して押す。咲の腰が浮きそうになって、フェリクスのもう一方の手が腰を押さえた。

「逃げるな」

「に、げて……ないっ……♡」

「体が逃げている」

言いながら、指の動きをわずかに速めた。

「あっ♡ あっ♡ やっ……んっ……♡」

声が止まらない。堪えようとするほど、息が詰まって余計に漏れる。フエリクスがそれを面白がっているのが心配でわかった。

「もっと聞きたい」

「……意地悪……っ♡」

「そうだな」

あっさりと認めて、指を増やした。二本になった指が秘所の中をかき回すように動いて、咲は声を殺せなくなった。

「あっ♡ ん……っ♡ ふあっ……♡ やっ、ダメっ……フェリクス……っ

♡♡」

「ダメじゃない。いきそうか」

「んっ……っ、わかん……ない……っ♡」

「正直に答えろ」

「い……きそう……っ♡」

フェリクスが指を深くした。秘所の奥を押し込むように、律動的に動かす。咲の背中が弓なりにになった。

「あっ♡ あっ♡ ん……っ♡——っ♡♡」

波が来た。体の奥から広がって、つま先まで痺れるような感覚が走った。

咲は声を上げながら、フェリクスの腕にしがみついた。

しばらく、二人とも動かなかった。

咲の荒い息だけが部屋に満ちていた。フェリクスが指をゆっくりと引いて、咲の額に額を合わせた。その体温が近くて、咲はうまく考えられなかった。